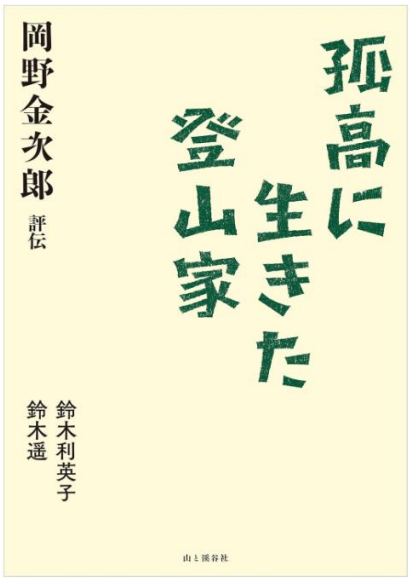
📖 孤高に生きた登山家　岡野金次郎　評伝（鈴木利英子　鈴木遥　著）



著者紹介

鈴木利英子（すずき・りえこ）

神奈川県平塚市在住。製薬会社に勤務しながら山に登り始める。山岳会に所属し、山スキーと沢登りを中心に登山活動を行っていた。出産後は薬剤師として働きながら、会に所属せず年数回登山を続けていた。２０１１年に平塚人物史研究会を有志で立ち上げ、冊子「平塚ゆかりの先人たち」を発行した。現在は地元の山岳会に所属し、国内外の山々を歩いている。

鈴木　遥（すずき・はるか）

神奈川県平塚市出身。出版社勤務を経てフリーランスに。著書「ミドリさんとカラクリ屋敷」（集英社文庫、第８回開高健ノンフィクション賞次点作）では平塚で出会った“屋根から電信柱の突き出た不思議な家”の謎を追って、北海道開拓移民三世の生き様やそのルーツを描いている。ノンフィクション制作の延長で街歩きの仕事もするようになり、毎年春と秋に関西で新作コースを案内する「遥さんと街歩き」シリーズは２０２２年に十周年を迎えた。取材執筆から街歩きツアーの企画まで幅広く創作活動を行っている。＜著書より＞

孤高の登山家　岡野金次郎。この書物で出会うまで全く知らなかった。たたえる記念碑が湘南平に建立されていることも知った。それとも知らずに偶然にも昨年のシリウスの山行で湘南平に会員数名と訪れていたのである。まさに運命的な出会いである。

読み進めていくうちに槍ヶ岳に日本人登山者として初めて登頂したとか、その登頂によって日本の近代登山の幕が開き、後に彼らのような活動をする人たちを登山家と呼ぶようになったとか、登山界の先駆者であることがわかる。また、あの有名なイギリス人宣教師のウオルター・ウエストンと出逢い、交流を始めている。そのことが日本山岳会の設立につながっていく。

そんな先駆者で功労者である岡野金次郎であるが、不思議なことに日本山岳会の設立メンバーに入らず、日本山岳会から距離を置き、ほとんど知られることなく生涯を閉じている。その生涯は謎が多い。というのも記録が日記程度で、しかも関東大震災ですべて日記を消失してしまった。従って登山家としての山の記録はほとんど残っていない。しかし生前にはほぼ無名であった岡野金次郎が長く生きたことで、晩年から死後へと思いがけない展開を遂げていく。マウンテン・フィーバー（山恋い）の言葉に象徴されるような、純粋に山に登ぼる岡野のような生き方にようやく時代が追いつき、次の世代の登山家たちに徐々に評価されていった。健脚な岡野は全国すべての山を踏破すべく誰より早い時期から、この時代にして誰よりも長く、誰よりも多くの山へと精力的に脚を伸ばしていった。その様子を小島栄氏は「山岳」の中で「一生涯、歩いて歩いて歩き捲くり、八十四才の恒例でも歩き続けている最中に永久の眠りに就いた人は、恐らく古今東西を通じて絶無であろうと思われるが、茲にたった一人いる。乃ち岳人の先覚者岡野金次郎さんである」と記す。

「岡野金次郎の人生を追うことは、山岳会の歴史を辿り直して、そのつくられ方を再検証していくことでもある」と著者は語る。（IK）

孤高に生きた登山家　2024 年 10 月 10 日発行　　山と渓谷社　2970 円